

心のケアの現状を踏まえ、準備について考える

東日本大震災被災地の今から

少なくとも震災直後から各自治体の避難所運営体制が整うまでは、その学校の教職員が、避難してきた人々と学校にいる子どもたちの命を守らなければならないのです。

宮城県公立中学校教頭

中里 和裕

なかざと かずひろ 一人一人の子どもたちが自己実現を目指すためには、教師による支援と子どもたち同士による支え合い・助け合いが大切だと考えています。

はじめに

東日本大震災から五年五か月の歳月が流れました。

私は今年の三月まで、宮城県で最も被害の大きかった石巻市で、学校現場から離れ、震災後の心の支援にかかわる仕事をしていました。

石巻市では、この五年間で復興は進ん

.....

でいるものの、平成二八年八月現在で七〇〇〇人近くの人々が、今なお仮設住宅での暮らしを余儀なくされています。

学校に目を向けてみると、被災から復旧した学校や、新しい校舎の建設が進んでいる学校がある一方で、被災による校舎の損壊や被災後の児童生徒数の減少により統廃合された学校もあります。

その中で、小学校二校、中学校二校の子どもたちは、現在も仮設校舎や他校の

校舎を間借りしての学校生活を続けています。

このような状況の中で、今年の春、震災当時小学校一年生だった子どもたちが小学校を卒業し、中学校に入学しました。今や、小学校に在籍しているのは震災当時一〜六歳の未就学の子どもたちになり、中学校に在籍しているのも震災当時小学校一〜三年生の低学年だった子どもたち、ということになったのです。

懸念される問題行動の増加

.....

震災直後から、石巻市では県内外からたくさんの方の支援をいただきました。

その中で、子どもたちの心のケアについても、各学校への教員やカウンセラーの緊急派遣、スクールソーシャルワーカーの追加配置や児童精神科医の定期的な学校巡回など、さまざまな形での支援をいただくことができました。

また、現場の教師も、自らも被災し、家族や住居を失いながらも、一日も早く子どもたちの日常を取り戻そうと、懸命

に努力を続けてきました。

その甲斐もあって、多くの子どもたちは心に深い傷を負いながらも、明るく元気に学校生活を送ることができています。

しかし一方で、阪神・淡路大震災後数年を経過して子どもたちの問題行動が増加したという報告があるように、現在、石巻市でも問題行動の増加が懸念されています。

それはいつたい、どのような理由によるものなのでしょうか。

子どもたちの背景にあるものを考える

.....

震災によって子どもたちの生活は大きく変化することになりました。

特に津波被災地域の子どもたちは、大切な家族や住み慣れた住居を失ったばかりでなく、生まれ育ったコミュニティや毎日通った学校も失い、被災直後は避難所から、その後は内陸部の各所に設置された仮設住宅団地から、内陸部の他の学校に間借りした学校に通うことになりました。

なかには、遠く離れた仮設住宅からスクールバスで学校に通わなければならない、放課後は友達と遊ぶ時間もなく帰りのバスに乗らなくてはならないという子どもたちも多くいました。

一方で、同じ仮設住宅団地に別々の学校に通う子どもたちがいることから、団地内でこれらの子どもたちの間に人間関係のトラブルが起きているという話も聞きました。

また、もちろんですが、震災は子どもたちばかりでなく、その保護者の生活にも大きな変化をもたらしました。

保護者の方々は震災によって子どもたちと同じように心に深い傷を負いながら、悲しみに暮れる間もなく、仕事の再開や住宅の再建など、子どもたちを育てるために現実的な問題に向き合わなくてはなりませんでした。

やがて時間の経過とともに、何とか生活の再建に漕ぎ着けた方と、思うように再建が進まない方との格差が目立つようになっています。

また、長期間に及ぶ狭隘な仮設住宅で

の暮らしが、家族間や近隣の住民同士の人間関係におけるストレス要因となっているケースも多く見られました。

このような状況の中、東日本大震災が発生した年には減少した児童虐待に関する相談件数は、翌年から増加に転じ、石巻市を管轄する宮城県東部児童相談所が扱った昨年度の児童虐待に関する相談件数は一二三六件と、平成二六年に比べ六二件増え、震災前の数字を上回っています(表参照)。

特徴的なのは、その内容が

表 宮城県東部児童相談所の児童虐待相談件数

| 年度(平成) | 21年度 | 22年度 | 23年度 | 24年度 | 25年度 | 26年度 | 27年度 |
|--------|------|------|------|------|------|------|------|
| 件数 | 120 | 195 | 109 | 144 | 154 | 174 | 236 |

(注) 東日本大震災発災は平成23年3月11日。

(出所) データは宮城県のホームページと三陸河北新報社「石巻かほく」2016.5.18より。

子どもの前での夫婦間のDVやのしり合いといった「心理的虐待」が半数の一三二件を占め、「身体的虐待」(五九件)の二倍以上となっていることです。

先に述べたように、震災直後から子どもの心のケアには手厚い支援をいただくことができていますが、大人の心のケアについては、子どもたちの保護者の世代まで十分に支援が行き届いているとは言えない現状があるのです。

アセスメントを大切にする

.....

ここまで述べてきたように、子どもたちは震災で心に深い傷を負い、その後も日々の生活の中でさまざまなストレスにさらされながら学校に通ってきています。

でも、ひとたび学校に來ると、大半の子どもたちはそんな内面はおくびにも出さずに、友達と明るく元気に、毎日の学習や生活を頑張っています。

しかし、その姿に私たち教師は安心してはいけません。

震災から五年を経過し、次第に復興が

進むにつれて、学校現場では、意識して目を向けなければ、そうした子どもたちの背景に気づけないことも多くなってきました。

特に、津波被災地からの転居に伴い、津波被災を経験していない内陸部の学校に転入学したケースでは、周囲の子どもたちも、教師も、その子どもが震災でどんな経験をし、その後どんな暮らしをしてきたのかを知らないまま、明るく元気に振る舞うその姿の奥にある悲しみや苦しみ、つらさに気づけないことも多いのではないかと危惧しています。

このように、身近にいる教師や友達も気づけないような子どもたちの頑張りは、五年経った今でも現在進行形で続いています。そして、その頑張りが限界に達したとき、非行や不登校などの問題行動となつて現れてくるのではないかと、私は考えるのです。

そこで大切にしたいのが、子ども一人一人についてのアセスメントを大切にすることです。

今回のような大きな災害があった場合

はなおさらですが、むしろ普段から、学校で見える様子だけで子どもの心の状態を判断するのではなく、家族関係や地域の環境、生育歴といった、子どもの背景にあるものをしっかりとらえ、アセスメントすることが必要だと思うのです。この意識があれば、学校では決して見せない悲しみや苦しみ、つらさに共感し、必要なときに必要な支援を行うことができるのではないかと思います。

そして、ここでもう一つ大切なことは、アセスメントの結果を学校内で共有することはもちろん、保護者の了解を得たうえで、進学先の学校や転出先の学校にもきちんと伝えることです。そうでなければ、子どもや保護者は、進学や転出のたびに新しい学校に、つらい震災の記憶を何度も話さなければならぬからです。

こうした話は、進学先や転出先の学校にとつても、直接には聞きづらいものです。そうした意味からも、普段から、このような子どもの支援に必要な情報について、学校間で情報共有ができるシステムの構築が必要だと考えています。

子どもの心に寄り添う

それでは、実際にはこのような子どもたちに対して、学校はどのような支援を行えばよいのでしょうか。

ある内陸部の学校の先生から、津波被災地から入学してきた子どもへの対応について、「被災した子どもだからといって、特別な扱いをしないようにしている」という話をうかがったことがありました。

しかしそれは、子どもが自分の内面にある悲しみや苦しみ、つらさを、教師や周囲の友達がわかってくれているという安心感をもてこそ意味があるのではないかと思うのです。

たしかに普段の学校生活の中で、被災した子どもだけを特別扱いする必要はないと思いますし、それはその子ども自身も望むことではないと思います。

大切なのは、教師がその子どもの背景にあるものを理解し、常に心の内面を意識しながら、子どもの心に寄り添おうとする姿勢です。

.....

普段からこの姿勢を大切にしながら、日常の学校生活ではできるだけ特別扱いをせずに接する中で、授業や行事の中でその子どもの悲しみや苦しみ、つらさに触れる心配があるようなときに、適切な配慮をしてほしいのです。例えば、震災にかかわる授業を行うときには事前に「大丈夫？ 無理に出なくていいんだよ」と声をかけたり、時には無言で肩を抱き「あなたの気持ちはわかってるよ」というメッセージを送ることができれば、それだけで子どもは安心することができているのではないかと思うのです。

そして、もちろん、子どもの話をよく聴くこと、これは被災の有無にかかわらず大切なことだと思っています。

ただし、特に被災経験を話すことへの抵抗は、子どもによって個人差が大きいように感じています。

最初に述べたように、現在小・中学校に通う子どもたちは、震災時は小学校三年生以下の子どもたちです。そのため、震災時に自分が経験したことを、自分の中できちんと受け止め、整理できていな

い子どもも多くいるのではないかと思います。

思いを言葉にして表出することには、自分の感情を改めて理解し、整理することで心の成長につながっていく意味があると思いますので、時には「啐啄同機」^{そつたくどうき}（「啐」は雛がかえろうとするとき殻の内で鳴く声。「啄」は母鳥が外から殻をつくこと。啐啄同時とも）で、話せる準備が整った時期に声をかけることも大切ではないかと考えています。

ピア・サポート環境を整える

.....

一方で、特に周囲の子どもたちと同様の被災体験がない場合は、これらの子どもたちへの働きかけも重要です。

実際、被災した子どもの事情を知らなかったために、悪気もなく震災のことを話題にしてしまい、結果としてその子どもを傷つけることになったという話もよく耳にしました。

どのような形で周囲の子どもたちに被災の事実を伝えるかは、子どもたちの発達段階やその学校の実情によっても異なる

ると思います。可能であれば、被災した本人とも相談のうえで、事実を伝えるだけでなく、互いの立場を認め、尊重し、そして支え合い、助け合う、ピア・サポート活動につなげていくようにできればよいのではないかと思います。

これから起こり得る
大災害に備えて

.....

これまでに述べてきたように、これから起こり得る大災害に備えて教師が準備すべきことは、実は普段から大切にすべきこととまったく同じではないかと考えます。つまり、以下の三つです。

①子どもの心の内面を理解するアセスメントを大切にすること

②子ども一人一人の心に寄り添うこと

③子ども同士によるピア・サポートが行える環境を整えること

これらがそれぞれの学校で整ってさえいれば、災害発生時のさまざまな心のケアに関する緊急支援も、より効果的に活かせるのではないかと思います。

おわりに

.....

東日本大震災発災時、学校の教師にまず求められたのは、続々と学校に避難してくる人々への対応でした。それまでは恥ずかしながら、自分の勤務する学校が避難所になっているのは知っていても、実際に避難所になったとき、どう動けばよいのかについては考えたこともありませんでした。

これはおそらく、日本中のどの地域でも、どんな災害の場合でも、学校、そして教職員に求められる現実ではないかと思っています。つまり、少なくとも発災直後から各自自治体の避難所運営体制が整うまでは、その学校の教職員が、避難してきた人々と学校にいる子どもたちの命を守らなければならないのです。

そんな事態の中でも、子どもたち、そして避難してくる方々の心のケアを忘れずに行動できる、そんな教師にならないければならないと、五年ぶりに学校現場に戻った今、改めて考えています。

やってみよう！
ピア・サポート



やってみよう！ピア・サポート

ひと目でポイントがわかる
ピア・サポート実践集

日本ピア・サポート学会／企画
春日井敏之 西山久子 森川澄男
栗原慎二 高野利雄／編著

日本ピア・サポート学会が総力を挙げて刊行！ピア・サポートの典型実践とポイントを厳選して紹介します。
2,200 円＋税

「子どもが何か問題に直面したとき、友達に相談することが最も多い」という事実に基づいて、子ども同士が支え合う関係を育むのがピア・サポートです。

すぐ始められる ピア・サポート指導案&シート集

「ピア・サポートのトレーニングを始めたいけど、何から、どう始めたらいいんだろう……」。こんな人にピッタリなのが本書です。ピア・サポート、始めてみませんか。

森川澄男／監修 菱田準子／著

2,300 円＋税



Tel 03-5754-3346

ほんの森出版

[ホームページ] [ほんの森出版](http://honosono.co.jp) 検索